

「もし、日本が(軍事的に)攻め込まれたら、どうする？」

先の大戦敗戦後、徹底した平和主義を具現化するという第9条を持つ日本国憲法が公布された時から、「もし攻められたらどうするのか？」という問いは何かしら発せられて来たことだと思う。

僕の感覚では、物心がついた頃には確かにこの問いが何かもやもやと心の奥底で蠢くように漂っていたように思っていたと認めるところはあるとしても、まさにその問いが現実であるかのように鎌首を持ち上げ、急速に世の中を駆け巡りだしたのはつい最近のことなのだ。

「もし攻められたらどうする？」

この問いに頭を抱えてしまうのは、実は答えが難しいからではない。
ほとんど答えは2つしかないと言っていいほどのだから。

「攻められたら、降伏するあるいは逃げる」か、「攻められたら武器を持って戦う」か、それぐらいしか思いつかないのだ。

ところがこの簡単な2者択一が、考えようによっては大変な難問になってしまう。

もしも好戦的な人であれば、答えは一つ。戦うのみと言ってしまおう。
攻められる前に、こちらから攻めてしまおうという考えさえ正当化しかねない。

しかし、仮にも憲法の趣旨を尊重し、平和主義を貫く国家でありたいと考える人にとっては話が違う。

「攻められたら、降伏する」と言う事は、この問いに対する皮肉を込めた答えとしては意味深いものかも知れないけれど、実際に降伏するという選択は極めて不愉快なものだし、逃げ続けることの不可能さや降伏後の道筋についての見通しが見えず不安が残る。

では平和主義の名のもとに、「戦う」という選択をすとなれば、もっと困難な話になる。
だから、よく言われる「専守防衛の範囲で戦う」と考えるしかなくなる。

ところが、その「専守防衛の範囲」とはどのような範囲なのか？という新たな課題が広がる。
まして集团的自衛権を、一部とはいえ合憲とするような決定を強行する政権下では、歯止めとなるラインがほとんど想定できなくなっている。
だからますます分からなくなって来る、不安が増大するのだ。

一見単純で、また切羽詰まったようにも見えるこの問い、「もし攻められたら」に真摯に答えようとすれば、まるで泥沼へと引きずり込まれるようだ。

答えは、「戦う」か「戦わない」か、この二つ以外には本当はないのだろうか？

例えば為政者が、答えにくい問に対してよく言うセリフ「仮定の話にいちいち答える必要はない」と一蹴するのを僕はよく見ている。
そして「もし攻められたら」というのは、明らかに仮定の話だ。

ところが明らかに仮定の話なのだが、しかしそれはもはや仮定の話ではないのだと、時代は変化したのだと思わせるために、仮想敵国を想定する、Jアラートで恐怖心をあおる、あげくの果てに敵国となりうる国に対して嫌がらせや挑発までし、関係をわざと悪化させて不安をあおる等々、こういう手法を僕たちは見てきたのではないだろうか？

日本が戦後一度も戦争に参加しなかったというのは現実であって仮定の話ではない。
「もし攻められたら」は、実はまさに仮定そのもの。それもかなり非現実的な仮定の話ではないのか？

「もし攻められたらどうするのか」を考える事は、「全く無意味な事、無駄な事だ」と言うつもりはさらさらしない。いちいち答える必要はないと言うつもりもない。

しかし、「もし攻められたら」という問いが『唯一の問いではない』と言いたい。この問いは、「仮定」の問いなのだ。僕たちの国は現実には70年以上も戦争をしてこなかったという実績があるのだから、その**現実をいかに持続していくか？**についての問いは、極めて現実的な問いなのだ。

「もし攻められたら」という、**答えに窮するような問い**かけにどっぷりとはまり込むのは、実は戦争が出来る国にした一部の人々の巧妙なレトリックに操られているのではないか？

「もし攻められたら」を考える事を否定はしない。けれどもこう答えたらどうだろう。

「もし攻められたら」を10時間考えるのはいいでしょう。20時間でもいいでしょう。30時間でも40時間でもいい。でもその代わり、「いかにして戦争をしないか、戦争に巻き込まれないためにどうすべきなのか？」という問いにはその2倍も3倍も、5倍も10倍も時間をかけて考えようではないかと。何せこの「いかにして平和を維持するか？」という問いの方は仮定の話ではなく、我が国が現在進行中の現実の話なのだからと。

2018. 07. 16 安井 伸介